

# ミクロネシア連邦チューク州の観光について —ウエノ島を中心に—

宋多情（人文社会科学研究科）

## 1. はじめに

このレポートは太平洋島嶼学特論の研修によりミクロネシア連邦のチューク州を訪ね、私の研究テーマである観光を中心に現地調査を行い、その結果をまとめたものである。チューク州でも特にウエノ島を中心に、チュークの観光の歴史および現在の状況を把握することで、チュークにおいて観光はどのように位置付けられているか、また、観光を価値ある産業として発達させるためにはどの部分の改善が必要であるか考察するのが目的である。

## 2. ミクロネシア連邦チューク州について

ミクロネシア連邦はヤップ、チューク、ポンペイ、コスラエの4州に分けられており、チューク州は、陸地面積が88平方キロあり、7つの大きな島がある。中心になるのは、ウエノ島であり、チューク国際空港も位置している。グアムからの乗継便で約1時間半かかる。

## 3. チューク州の観光

### 1) 元観光局長が見たチュークの観光

2003年から2013年まで観光局で勤務し、現在はTruk Stop HotelのマネージャーであるMr. Mason Fritzからチューク州の観光の流れについて聞くことができた。

1900年代の初期から日本とオーストラリアの人々がたくさん来た。日本人たちがオーストラリアに行き来する間に立ち寄るようになり、だんだん居住する日本人も増えてきた。その後、軍隊が立ち上がり、戦争が起こるようになり、アメリカ海軍の渡来後はこの島に行き通うことが禁止になった。

そして、1960年代になってから解放され、観光客も受け入れるようになった。観光客を引き寄せるためのアイデアとして、政府のために仕事する人々のために小さなヘリコプターを利用した。

多くの人々は戦争が何を残したか知りたがった。一部の人々が小さなホテルを作り始め、Continental Hotelの事業もそこから始まった。1976年には有名なフランス人Gustoが来て戦争の痕跡である船などをフィルムに残した。その後、もっと多くの作家、映画関係者がこの島を訪ねた。日本政府も同じ頃この島との関係を再定立しようとした。戦争に興味を持つ人たちは増え続け、当時の観光客は年間400～500人であった。

1980年代にはまだ大きい数値ではないが、年間1000～2000人の観光客があった。ホテルがもっと作られ、1990年代には観光客がもっと増えてきた。そして、今日は4000～5000人に至っている。

チュークの観光が産業として発展するためには、資金の創出が必要である。また、島の面積はもちろん、ロシアやヨーロッパ、アメリカから地理的に遠いこと、小規模である空港、人材の不足も問題として挙げられる。それが解決されてからこそ観光の発展に繋がると思われるが現地人の力のみでは難しいのが現実である。

## 2) 日本人ガイドが見たチュークの観光

チューク州で 37 年間 Truk Ocean Service という旅行会社を運営している末永卓幸氏によると、観光客の割合としては、アメリカからの観光客がもっとも多く、その次は日本で、ヨーロッパ、オーストラリアからも訪ねてくる。また、ロシアの観光客も最近増加している傾向である。

観光目的として、日本人の観光客は約 4 割がダイバーで、戦争で亡くなった家族の慰霊を目的に来る人も多い。その他にも、戦跡を訪れたり、新婚旅行や釣りのために足を運んだりする人も多い。

チュークは観光地としての受け入れ態勢が不十分であるのが事実であるが、沈船ダイビングに関してはすごく特殊で充実している。そのため、日本人以外の外国人観光客のほとんどは、沈船ダイビングが目的である。Truk には Blue Lagoon という大きなダイビングショップがあり、Truk の沈船ダイビングは、アメリカの「世界のダイブスポットベスト 100」で毎年ベスト 10 に入る。2004 年には沈船ダイビング部分で世界の No.1 になった。日本人ダイバーは沈船よりきれいなサンゴと魚と海底の景色などに興味を持っている。

しかし、チュークが観光地として成り立つためには、様々な改善点が求められる。まず、人材を育成することが大事である。教育については、アメリカから独立する前よりよくなっているのが状況である。次に、道路の整備が挙げられる。パンクが多発するのはもちろん、歩きながら観光することができないのも問題である。

しかし、このような状況でも、マニアの人たちは訪ねて来るので、チュークの良さを知っている人たちに楽しんでもらうこともいいと思う。また、観光客数がそこまで多くないことで、自然がそのまま残っているのも魅力だと言える。



写真 1 チューク州政府観光局の様子

## 3) 自分で体験したチュークの観光

### ①チューク州政府観光局

最初にチュークの観光に関する基本的な情報を得るために観光局に訪問することになった。チュークの観光局はチューク国際空港の 2 階にあった。しかし、実際に訪ねると、観光局と言える様子ではなく、関係者も誰もいなかった。一応、観光に関するパンフレットは少し置いていたが、全体的な様子で見ると、観光局があまり機能していないことを分かるようになった。



写真2 観光パンフレット

写真3 Blue Lagoon Resort の Gift Shop



## ②お土産から見たチュークの観光資源

ウェノ島にある5つのホテルの中で、高級リゾートである Blue Lagoon Resort と自分が泊まった Truk Stop Hotel の Gift Shop を訪ね、どのようなものをお土産として販売しているのか確認した。お土産から現地の人々が何を観光資源として見ているのか把握するのが目的であった。

お土産は木彫りの置物や、ココナッツの繊維を使って編んだ首飾りなど手工芸品が多い。



写真4 ラブ・スティック



写真5 デビルマスク

## 4. まとめ

ミクロネシアは一つの独立した国であるが、アメリカから予算をもらうことや日本からの支援を受けるなど、経済的な面ではまだ力が足りなく、また、産業と言えるものがあまり成り立っていないのが現状である。このような状況から見ると、現在のチュークの観光はユニークであると感じられる。産業の発展が進んでいないことで維持されている豊かな環境資源と、戦争が残した沈船などの遺跡はマニアとも言える一部の人たちに愛されている。そこで、チュークが観光地としてさらに発展するためには、以下のような改善が必要であると思われる。

まず、道路の舗装やゴミの処理などの環境整備が必要である。ウェノ島の道は未舗装道路が多く、以前に舗装された道が破損し、あちこちに水溜りが多かった。舗装された道もあるが、一部に過ぎないので、車の運転がたいへんで、タイヤがパンクすることもあるのだ、道路の舗装と管理にもっと力を入れるべきだと思う。

次に、ゴミの処理については、道に普通にゴミが捨てられていて、そのまま放置されていることが問題である。特に、港にゴミが多い。港のすぐ前の海はゴミが浮遊しており、水が汚れているが、ゴミがあるにも関わらずきれいな自然を保っている。まだ環境への負荷が小さいから維持されているのかも知れないが、将来的には環境保全のために対策を考える必要があると思われる。現在、日本外交協会が「リサイクル援助事業」を実施し、その成果も出ているのでそれが持続されることを期待している。

最後に、政府が教育制度をきちんと整えることで、人材を育成することが大事である。教育により経済活動の幅が広がるのはもちろん、観光に関しても彼ら自身がレベルアップすることで、より良いサービスをお客さんに提供し、利益創出にも繋がるとと思われる。

今回の研修でお世話になったピースの方々、ご指導して下さった山本先生、太平洋島嶼学特論のメンバーにお礼申し上げます。また、ウェノ島でインタビューに応じて下さった Mr. Mason と末永さんにも感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

#### 参考資料

ミクロネシア連邦政府観光局 HP

<http://www.visit-micronesia.fm/jp/index.html>

ミクロネシア連邦政府観光局パンフレット

「Chuuk State in Federated States of Micronesia」